

國學院大學學術情報リポジトリ

近津三志著 『西行-いのちなりけり-』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊島, 秀範, Toyoshima, Hidenori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000184

〔紹介〕

近津三志著 『西行——いのちなりけり——』

豊島秀範

近津三志（ちかつさんし）。本名は千勝三喜男）の大著『西行——いのちなりけり——』（平成27年2月刊、五八〇頁）は、西行に關わる歴史的事実を尊重しつつも、空白部分の多くは創作を交えながら、七十三年の西行の生涯を描いた歴史小説として注目される。

著者は、大正15年東京生まれ、昭和18年國學院大學予科に入学、折口信夫（釋迢空）に師事、その主催する短歌結社「鳥船社」同人。昭和20年兵役に服し、昭和23年國學院大學を卒業、角川書店編集部に入社。昭和35年國學院大學久我山高高等学校教

諭、平成4年同校を退職、國學院大學栃木短期大学国文学科講師就任。平成8年久我山中学高校校長に就任、平成11年同校長退職、短大講師に復し、平成22年に83歳で短大講師退職。

著者には既にエッセイ集『行方も知らず』（桜楓社、平成4年）、歌集『血縁』（短歌研究社、平成14年）、編著『現代短歌分類集成——20世紀——うたの万華鏡——』（おうふう、平成18年）、歌集『山毛櫨の泉』（ロアン新舎、平成20年）があり、本書は五冊目の著書。久我山高校退職後の二十余年に、これほどの業績をあげられた熱意に敬意を表したい。

本書の特徴は、西行の生涯で不明な部分は西行が残した和歌を徹底して読み込み、そこからの連想によって補っている点にあり、そこに著者の歌人としての資質も認められる。

歴史的な事柄とされる「白河法皇と待賢門院璋子との関わり」〔璋子への西行の恋慕〕〔新院崇徳上皇の讃岐への配流と上皇への西行の思慕と言動〕などについても、西行や関連人物の和歌を援用することで、内容と展開に想定可能な膨らみを持たせている。

一方、確証の得にくい「義清の出家の理由」〔西行と家族との関わり〕や「平清盛との邂逅とその後の関わり」〔紀志丸（義清）を支えた嘉七の存在〕、そして「創弁の支援を得て歌人西行が迎える最期」などでの場面設定や会話文の巧みさは、著者の長年にわたる西行への思いが導き出したものである。

意見の分かれる「義清の出家の理由」について、著者の理解を確認してみよう。

西行の父康清（左衛門尉）は、撰関家の所領である肥沃な紀伊国田仲庄の経営を代々担う在地領主の家に生まれたが、検非違使尉の時に延暦寺と園城寺との抗争に関わって三十歳ほどで死去。だが祖父季清は在地領主として健在で、紀志丸が義清と改名した元服の儀式も、私財寄付の成功で十八歳で兵衛尉と

なった時も、祖父の蓄財に支えられ、二十歳ころには（鳥羽院の下北面）となった。義清の身分では武人として恵まれたスタートで、和歌や武芸も注目を集めていた。その彼が、二十三歳で突然に出家したのである。

同時代の藤原頼長は、日記『台記』に「そもそも西行は、もと兵衛尉義清也。重代の勇士たるを以て法王に仕ふ。俗時より心を仏道に入る。家富み、年若く、心に愁無きに、遂に以て遁世す。人これを嘆美する也」と記したが、「西行物語絵巻」その他の資料から「親しい友の死」〔高貴な上臈への失恋〕〔無常観による仏教への帰依〕〔撰関家や皇位継承をめぐる政争への失望〕などが出家の理由とされてきた。

これに対して、本書は、出家の理由を、慎重に、しかし明快に記している。すなわち、序章に、紀志丸（義清）四歳の時に父康清が命を落とし、さらに十三歳で母（文の前）が病で急逝したことが、若い紀志丸の「深層に、無常観と欣求浄土の念を宿したことは、否定すべくもなかった」と記す。同時に、父康清の死後、母が紀志丸と住んだ、祖父清経の双ヶ丘山荘の近くに、待賢門院璋子が御願寺（法金剛院）を建立したことで、璋子の姿を垣間見て胸をときめかせた紀志丸の姿も描いている。しかしその後、金剛院で女院璋子が義清を求めた際に、彼は

「女院さまは別格のお方」であり「女院さまと肌を合わせるようなことになれば……女院さまも……ただの女性に変じてしまします」と告げて立ち去り、その求めに応じない姿を鮮明にしている。

一方、出家に際して紀州田仲庄の家督を、成功で兵衛尉となった弟仲清に譲り、妻子の世話を頼むという義清の姿を想定している。

平正盛・忠盛父子により下北面の存在意義が急速に失墜したことや、院政下での隠微な男色という習俗なども、下北面としての義清には精神的・生理的に耐えられずに、〈出離のほかはない〉という答えにならざるを得ず、併せて〈なにゆえに世を背くのか〉と釈明するよりも先に〈「世を背く」ということばのひびきが、若い義清の背を強く押すのである〉という義清像を想い描いている。

丘巻は、妻の沙世に「そなたとの縁はこの世ばかりではない。来世にはきつと一つ蓮の上に生まれかわる身となって、仏の道に安んじようぞ」と来世を約したことである。この言葉は、およそ五十年後に高野山麓の天野の里に、妻の沙世の庵を訪ねた西行に、妻が「悲しいとき、わたしはこの言葉を頼りに生きてまいりました」と語らせているのである。さらに「殿は

善知識におなりの上、仏の道、言の葉の道、ふたつながらこのころを致されておられるご様子、陰ながら嬉しう存じておりました」とも述懐する妻沙世の言動を想像し描くことで、西行が出家に向かった思いの一貫性を保とうとしている。

出家をした西行が目指した「仏の道」と「言の葉の道」は、妻子との絆を拒否するものではなく、特定の寺院に所属せず、聖として自由な境地に身を置くことで得られるはずの「仏の道」「言の葉の道」であり、その姿を、彼の和歌に即して結実させることが、本書に寄せた著者の思念であったろう。

「仏の道」の最後は、六十九歳で再び陸奥平泉へ向かった勸進の旅であった。平重衡の南都焼討で消滅した東大寺の再建に際して、大仏を鍍金する砂金の勸進であった。今回も遠江国の佐夜中山の久延寺に至り、そこで命終した阿弥陀房上人のことなど、三十九年前を偲び、思わず口をついて出たのが、

年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなりけり佐夜の中
山

との本書の副題となった歌であったという。

平泉での勸進は成功を収め、翌年の二月末に西行は十三湊から船に戻る。その半月前の二月十日には義経が追っ手を逃れて平泉に入ったことが、それとなく挿記される。

そして本書の最後。七十歳の西行は「御裳濯河歌合」（伊勢神宮内宮に奉納。判詞は俊成）と「宮河歌合」（外宮に奉納。判詞は定家）を完成させた。西行が目指した〈言の葉の道〉の完成である。それを決定づけるのが翌年、詠歌を断つ「和歌起請」を西行が賀茂別雷神に誓ったとする挿話の創出である。

さて、最晩年を迎えた西行を支えたのは、高野山で知り合った創弁（空寂）であった。創弁は河内の葛城山麓の弘川寺の座主で五十一歳。九月に七十二歳の西行を訪れた創弁は、弘川寺に設けた坊舎に西行を伴う。その翌月、待ちに待った定家からの判詞が届けられた。西行の「言の葉の道」は満願を迎えた。そして翌年の二月十六日、西行は、

願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ
 という願い通り、釈迦涅槃の一日後に、七十三歳の生涯を閉じたのである。

西行の最期を支えた創弁の姿は、著者の想念から生まれた人物だが、本書の掉尾を飾るに相応しい人物であり場面である。

西行の死後に出た『新古今集』には、西行の歌は最多の九十四首が撰ばれたことを付し、最後は「後鳥羽院御口伝」の「西行は、おもしろくて、しかも心も深く、ありがたくいできがたき方も共に相兼ねて見ゆ。生得の歌人とおぼゆ。おぼろげの

人、まねびなどすべき歌にあらず。不可説の上手なり」という言葉で締め括られていることは、本書が信ずるに足る内容であることを象徴するものである。（A5判、五八〇頁、MOKU出版刊、二〇一五年二月発行、三〇〇〇円＋税）